

# わいわい

## 秋号



民話ゆうき

### じんべい星

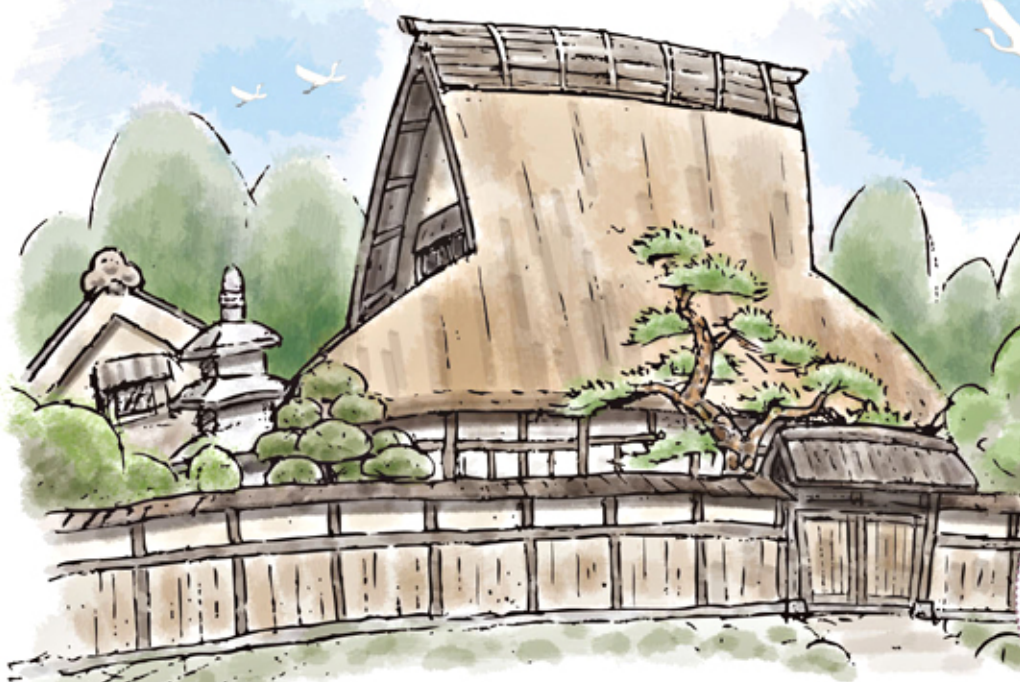
東茂呂の通りを行くと、中ほどにあればた屋しきがありました。

五反歩以上（五〇アール）もあるかと思われる屋しきにへいをめぐらし、うっそうとした木が生えしげっていました。

その昔は、たいへん栄えたとも思われる家の庭が、はがれた板べいの間からよく見えます。

# 民話を楽しくまわす

文・結城市教育委員会  
挿絵・佐々木明



池のはたには、五重の塔、雪見とうろう、春日とうろうなどがあり、美しい庭園のおもかげをとどめていました。家は入母屋づくりで尺二寸角（三六センチ）の大黒柱をまん中に、ひとかかえもあるはり大きな家をささえてがっちりしていますが、かべはおち、屋根に生えた草が、一そうさびしく古さを思わせませす。

ここに、じんべいは父親とふた  
りで住んでいました。昔は地主で  
したから何の苦労もなく大きくな  
りましたが、母親がなくなり、父  
親も病気がちになると家計は苦し  
くなっていきました。

働くことを知らないじんべいは、  
生活に困ると田畑を売ってその日  
の暮らしをたてていましたが、残  
る田畑も少なくなりました。じん  
べいは、(何とかして、自分の力  
で財産を取りもどさなければ  
…。)と思いました。  
わずかばかりの田畑をもとに、  
夢中で働きました。朝は暗いうち

に起きて草をかり、ひりょうをつ  
くりました。

また、夜は月の光でいねをかるこ  
うのように、朝早くから夜おそく  
まで、人の何倍も働きました。若  
い、じょうぶなからだにむちうっ  
て、よく働きましたが、ある時は  
水害に、ある時は日照りになやま  
されました。しかし、じんべいは  
村人たちとともに、はげまし合い、  
助け合いました。

村の人々は、口々に、  
「じんべいさんは、働き者だ。」  
といって、ひょうばんになりまし  
た。じんべいは、ただ働くばかり

でなく、人に対して親切でしたから、み  
んなにすかれました。困っている人には  
お金をかしてあげたり、相談相手になっ  
たりして、だれとでも明るくつきあいま  
した。

じんべいは、からだのつづくかぎり、  
雨の日も風の日も休まず働きつづけまし  
た。そのかいあって田畑も取りもどし、  
生活もゆたかになってきたある日、田ん  
ぼの見まわりに行つて、ぱったりたおれ  
てしまいました。こがね色にみのったい  
ねにかこまれて、息をひきとったのでし  
た。その顔は明るく、一生をつらぬきと  
おしたしあわせそのものの顔でした。  
「あの働き者のじんべいさんが亡く  
なったか。」

「ひとのいいじんべいさん  
が亡くなったか。おいしいこ  
とをした。」

村人たちは、  
じんべいの死を

心からおしみました。

それから数か月たったある日、  
おそくまで野良しごとをしていた  
村人が道にまよって帰れなくなっ  
てしまいました。こまっていると、  
きゆうにあたりが明るくなり、道  
を照らしました。おどろいて空を  
見上げると、一つ光った大きな星



があります。村人はまた、おどろ  
きました。このひかりかがやく星  
は、ちょうどじんべいのえ顔のよ  
うに見えるのです。

「あれは、たしかにじんべいさん  
のえ顔だ。」

「あれは、じんべいさんが星に

なったんだ。」  
と、さわぎました。じんべ  
いが天にのぼって星になっ  
たのです。

それからは、だれかが夜  
道にまよったびに星が道を  
教えてくれます。やさしい  
じんべいは天から村人たち  
を守り、村の発展をいのっ  
ているのかもしれない。  
村人は夕方になると、

「じんべい星がでたか  
ら、帰んべや。」

とっては、野  
良しごとをやめ  
て帰るようにな  
りました。

おしまい